

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 152号

平成26年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (1)

継続は修養の全部なり

信仰も他のものと同じで、日々忠実に堅実に進んで行くものである。この意味において日曜や水曜や金曜の集會に真面目に出席するのは意味あることと思います。

大經に「人有至心。精進求道不止。必当剋果。何願不得。」とありますが、普通に精神一到何事不成と云いますがそんな言葉が私の信仰を励ましてくれます。

私思う。人類が感謝せねばならぬ人々は皆一つのことを命がけでやり通した人のみである。或る人から「継続は修養の全部なり」と聞いておりますが、小さいことでもいざ実行となれば難しい。なるほど偉大なる信仰、人類を救う如き信仰のまれなるのも当然なことだろう。しかし我々は苦しくともやらねばならぬ。心がやれと命ず

るのではないか。

特に斎藤先輩の祈りが身にしみました。彼が「我生きるにあらず。キリスト我にありて生けるなり。何というしたわしい言葉でしょう」と祈り行かれるところ、自分もポーロのようになりたい。何万と数えることのできぬ清い霊を地球のあらん限り清める力、ああポーロの如き信仰を得たいものです。

(大正9年10月15日 金曜会)

信仰は力であり、生命である

「信仰」という小論文朗読。「信仰」は神の御言葉を信じ、それに
上がることである。それを得るには幾干かの時を要する。「信仰」を
動かすには智識を要するが、これを得るには智識を要せず。水は低
きにつき、煙の上に上がるは比重の差と習えどその本質なることは
明らかだ。「信仰」は理屈ではない。力であり、生命である。

(大正 10 年 2 月 11 日 金曜会)

吾人の信仰は、trust である、而して try である

吾人の信仰は trust である。而して try である。「信ずる事なくして事を断ずるは聾にして音の好悪を批評するが如し」との法然上人の言葉を引かれて説かる。

(大正 12 年 11 月 9 日 金曜会)

我信ず、之のみ

新約聖書のギリシア語は非常に simple である。

「それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど……ユダヤ人には躓物となり、異邦人には愚かとなれど」(コリント前書 1 章 18, 23)

ユダヤ人は証拠を、ギリシア人は理論的説明を求める。この二者は人間の要求だが、パウロは、我は十字架につかれたイエス・キリストを述べ伝う。信仰とは信ずることであり、証拠を求めることでも、理論的説明を求めるのでもない。カントは永遠は説明できないとはっきり説明している如く、我々有限の頭で無限を説明するのは不可能。永遠は信ずることによりてのみて把握出来る。信仰も霊の成長にも、少なくとも 10 年を要す。気長に信仰の道を励むようにして下さい。

吾信ず、之のみ。証拠が出来ぬからといい、又理論的説明が出来ないからといって嘆く必要はない。キリスト教は新しき生命の我らへの供給、我々の置かれた立場で味わえばよいのである。途中でやめることなく、分かるまで少なくとも 20 年、最小限 10 年はお勤めになるようにお願いします。

私は 20 歳の時に始まり、今 50 歳にして知りました。自分で検

査してみても分からない。段々段々分かるべきものである。道元が、朝露の中を歩けば何時濡ると分からぬが自然と濡れる。少なくとも10年20年と経つうちにしっかりと濡れて来る。天国の限りなき生命を自然と信ずることになる。

10年前にヘレンケラーが来た時、聾啞だが皆が拍手すれば空気と共に platform が振動する。人生においてその人生が我らに新郎となって天国を見せてくれつつある。要するに信仰は理論でもなく証拠でもなく信ずることである。どうぞ一日一日信じてお過ごしくださいように。

(昭和22年7月18日 金曜会)

信仰は聞くことによる

聖書 ヨハネ伝 3 章 1 ～16 節 イエスとニコデモとの対話

肉によりて生まるるものは肉なり、霊によりて生まるるものは霊なり。霊によりて新たに生まるるにはイエスを信ずるを要する。イエスをいかに信ずるか、モーセ野に蛇をあげし如く、人の子もあげらるべしとイエスは云い給ふ。故にモーセの蛇をイスラエル人が仰ぎ見し如く、十字架に上げられしイエスを信じ仰ぎ見よとのことなり。これが信仰なり。この信仰は如何にして起こるか。By doing か、然らず、by thinking か、然らず、by hearing だ。故にこれを話す人が必要だ。宣教の愚を以って神は人を救い給ふとはこのことだ。

(昭和 22 年 8 月 18 日 月曜日)

小西芳之助先輩の出発の朝

小西芳之助先輩、本日早朝、皆の知らない裡に御出発。

内会員一同「小西芳之助先輩の平安なる旅路を祈り申し上げます」

小西芳之助先輩「ありがとう」

(昭和 22 年 9 月 14 日 日曜日 山口良二)

同志会は良い先輩を持っている

聖書 ヨハネ伝 3 章 1～5 節

同志会は良い先輩を持って居る。先輩という言葉が気に入っている。どんな立派な先輩でも誰誰先輩と呼ぶ。私も小西先輩と言ってくれる。内会員から小西先輩と呼ばれて非常にうれしい。私は国務大臣になれないし、又なりたくもないが、同志会の良い先輩になりたい大望を持つ。同志会は自分に不思議な所だ。すなわち、伝道者を俗人になし、俗人を伝道者となしてくれた所だ。

去る 20 日の日、八王子市の金沢常雄先輩（大 7）を訪ね、昼食と一緒に頂いて非常なる励ましを得た。良い先輩の一人だ。唯一の伝道者だ。自分も同先輩に続いて伝道者になった。これで二人目だ。続いて来る人もあるだろう。僕もよい手本を示したい、金沢先輩にならって。

（昭和 22 年 10 月 23 日 木曜日）

世の中で心が濁らぬうちに信仰を持って

辻莊一先輩（大 9）や石館守三君（大 14）の後に続いて一言お祝い申し上げます。新入生の方に一言申し上げたいことは、〔同志会では〕卒業生をすべて先輩と呼ぶ。非常に誰でもどんなに社会的に有力であっても、学問があるとかないとか一切ぬきにして、先輩と呼ぶ。この間もたびたび私の家に来て小西先輩と云われ非常に愉快である。人間の力の差異は大して違ったものではない。このような時代収入がなくなった方がかえってきれいな服が出来る。神様のお恵みにより、要するに先輩という言葉で呼んでいるのである。

必ずしも皆有力なものにならずに無名な一人に、より正直な人になる。こういうような人が本当に人類をむしろ支えていると思います。同志会にはその精神がみなぎっている故、私のような無能なちり、灰の様な者も小西先輩と呼んで下さり、有力な人も先輩と呼ぶ。そういうような訳で、なるべく卒業した後も度々同志会に足を運ぶようになってもらいたい。

…新入生のお迎えの日だから、十分位聖書の話をしていただきたい。どんな風に神様がして下さるか分からぬが、我々の手に落ちてくることを一生懸命やること。お前の一番近くにあってすべき

ことを do! そうすれば神様が聖書は万人に解るように書かれたものと思う。やさしい Greek で書いてある。だから大先生にならずとも虚心坦懐に読んでそれから学べばよい。…

我々は天国、限りない命をその教えのお言葉で知るわけであるが、その天国が近づいている、地上は危ないぞ、天国の一員になれということやと思います。我々はこの言葉を受け天国の一員となり肉の死を恐れない。人生、永遠の命に続く生命が展開してくる、これはキリスト教の始めであり、終りである。我々は君達が学生時代において永遠に救われるという自覚を得られんことを望みます。この信念で各々の仕事に当れば会長先生の云われることはできるのやと思います。どうぞ諸君もそういう意味でこの場所で信仰を確立せられるよう、世の中で心が濁らぬうちに、このような信仰を持たれるよう心から祈るものである。

(昭和 23 年 4 月 23 日 金曜日)